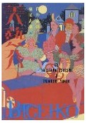
Entertainment Sonne

<[読書]筒井康隆『美藝公』２―子... | [掌の小説]座興に非ず>

2008-07-23 編集

筒井康隆『美藝公』３―「分」をわきまえなかった山口百恵

読書



美芸公

作者: 筒井康隆,横尾忠則

出版社/メーカー: ミリオン出版

発売日: 1995/11

メディア: 単行本

クリック: 5回

この商品を含むブログ (9件) を見る

美藝公１　美藝公２

里井の「もし日本が経済立国だったら」という仮定に対し議論を戦わせる美藝公ブレーンたち。曰く、「残虐性、残酷さが幅をきかせる子供の社会と同じであり、女性の底意地の悪さで成立している社会（P161、文庫版）」とのこと。

ところでこの座談会は、夏目漱石の『吾輩は猫である』の後半部分によく似ている。迷亭君が自殺の話とかしだすあたりとか。

里「しかし逆にあちらからみたら我々の社会は封建制そのものと罵られるかもしれない」

綱「確かに今のこの社会には貧困がある。餓えこそないが失業がある。しかし幸福な人間はこちらの方が多いはずだ」

山「あっちでは中流以上の人にすら常に不満があると思う」

岡「あっちにだって貧乏人はいるはずだが、彼らにとって夢とは、つまり娯楽や芸術とはなんなんだ」

美「あるはずですね、私には映画しか思いつかないが」

里「テレビじゃないでしょうか。映画などもテレビで流す」

プロフィール

何百年か前…そう千九百年代の終わりの頃だ 人間は口では地球を大切にしようだなんてのたまわっていたそうだが…
結局口先ばかりだったんだ

ozakit

タイガーフェイクファさんが大好きです。

最新タイトル

- 2013-06-11
- 2013-06-10
- 2013-06-09
- 2013-06-08
- おかーさんの新作
- 途中下車
- 2013-06-06
- [読書]教養としてのロースクール小論文　浅羽通明
- [読書]悪文　岩淵悦太郎編著
- ジャッキーさんがインターネットの世界に帰ってきたよ。

カテゴリー

- 漫画
- 音楽
- 日記
- 将棋
- アニメ
- うさぎ！
- 大学受験国語
- 自転車
- ドラえもん
- ネット
- 読書
- 映画
- 少年Aの散歩
- ウーチャカ大放送
- 掌の小説
- 掌の漫画
- 茄子と糠床

カレンダー

- ▼ 移動

カレンダー

<< 2008/07 >>

		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12

美「テレビなんかで映画を観ても臨場感はないし、気が散るのでは」

山「立ったり歩いたりしながら観るわけだ」

里「つまり食事をしたり立ったり歩いたりしながらでも観られるような映画がテレビで放送される」

岡「すると映画館用に作られた映画ではないのかね」

里「ほとんどはテレビ用に作られた映画だと思うよ」

山「国営放送ではないわけですか」

里「もちろん」

綱「映画人が作るわけかね」

里「そういう人もかり出されるでしょうが、中心は大企業の社員」

岡「民間のテレビ局がいくつも出来るだと」

里「十も二十もできるかもしれない。経済の自由競争だ」

岡「経済？　文化ではなくてか」

里「文化とか、そういう水準のものではないのだ」

岡「そんなにたくさん映画が作れるものか」

綱「映画産業社会でさえC級含めて週に五、六本がせいぜいなのに」

里「食事をしたり、立ったり歩いたりしながら観られる映画なのだから。テレビで放送するに適した作り方が開発されると思う」

岡「大量生産方式か。面白くもなんともない映画を観て喜ぶその社会の人間はアホか」

里「いや面白さも経済競争の要素だ」

綱「できるだけたくさんの人間を喜ばせるような種類の面白さだけを追求するのだね」

里「内容は似通い、芸術的なものは放送しないでしょう」

美「高度な芸術がまったく作られないのはあり得ないのでは」

里「平等主義なので、そういう作品を理解できる少数の人間がいてはいけない。他のテレビ会社と競争できる範囲で」

美「競争とはなんですか、家庭からの収入ですか」

里「大企業からの宣伝費です」

13 14 15 16 17 18 19
20 21 22 23 24 25 26
27 28 29 30 31

最近のコメント

2008-04-22 さすらう若人
2009-07-28 ozakit
2009-07-28 ぎょはぁ！！！！！
2008-11-11 ozakit
2008-11-11 OKDC

最近のトラックバック

2008-11-09 Drôle de sujet - すべての日本人がいま注目する本

最近言及したキーワード

GDP
グローバリズム
パターナリズム
ブルジョア
マルクス
芥川龍之介
岩淵悦太郎
皇室典範
小沢健二
星新一
生活維持省
青春18きっぷ
石原千秋
浅羽通明
大須観音
谷崎潤一郎
名鉄
鈴木先生
漱石
麒麟

ozakitのブックマーク

『新潮』 2009.2　読切作品 - 文学は面白いのか（仮題）
早稲田大学 ドラえもん研究会
神霊K・B・Y・Sが一体出た！
パンツは布ですのガイドライン
中洲産業大学 タモリ教授
やめる講座

ページビュー

87848

日記の検索

検索
● 詳細 ○ 一覧

美「なんの宣伝費ですか」

里「商品のです」

網「映画の中でタイアップするわけか」

里「映画の中へさりげなく商品を出すとか、俳優が商品名を言うとか、われわれの社会でいうタイアップではないでしょうね。独立した宣伝になるでしょう」

岡「じゃあ映画に関係なく、この商品を買えと放送で言うのかい。そんなもの誰も見ないだろう」

網「いや、情報社会だから、宣伝も情報になる」

岡「製造元が金を出して宣伝するのだから、悪い宣伝をするはずがない。嘘の情報だろう」

美「テレビは無料で見るのですか」

里「そのかわり大企業の宣伝も見なければならないわけです」

岡「いくら無料でも見ないだろう」

山「少なくとも自分の持っている品物の宣伝は見ないでしょう」

里「それは我々の考え方で、消費社会の基本性格は、限度がないということなんですよ」

山「ではやっぱり、すべての人が常に不満を」

岡「映画を観るためにテレビをつけたのに宣伝がやってたら怒るだろう」

？「慣れっこになっているし、映画の途中で宣伝を挟んだりして、テレビを消させない」

？「映画を中断してか」

？「それなら、続きを見たいから宣伝だって見る」

網「映画の流れがズタズタだ」

里「長時間のものはダメ。スタジオの中で全部やってしまえるようなものかも」

？「芝居を同時放送するのか」

里「芝居に似ているが、クローズ・アップもできるし、映画とうまくつなぎあわせたりもできる」

美「バラエティ・ショウのようなものになるかもしれませんね。芝居よりも歌や踊りならば、宣伝が入ってもドラマほどは腹も立たない」

岡「腹を立てられてまで宣伝するのか、商品が買ってもらえなくなる」

里「消費社会は宣伝に馴らされた社会なんだ。むしろ宣伝がないと物足りないぐらいに思うという」

山「オーケストラの演奏会もテレビで見せたりするでしょうね、ラジオよりはいいかもしれない」

里「オーケストラはやらないんじゃないか。ポピュラーな曲ばかりをショウ的にやるでしょう。交響楽は一部インテリのための芸術とされているだろうから」

山「オーケストラが誤解されませんか」

里「されるでしょう。文化というのはすべて面白おかしく、やさしく、娯楽的でなければいけない社会ですから」

岡「本当に怒るやつはいないのか？」

綱「いるだろうが、頭が固いとか考えが古いとか言われて笑われるから怒らなくなる。平等主義の社会だから、自分だけ違うことを言ったりしてひとに笑われるのを最も恐れるんだ」

岡「なんていやな社会だ」

綱「落語、漫才もやるだろう」

里「じっくり聞かせる落語はやらないでしょうね、前後を縮めてサワリだけを瞬発的に聞かせる」

？「じゃ、寄席芸にも誤解が」

里「当然なりますね。寄席好きの人間だけに独占させてはいけない、一般的で誰にでもわかるものでなければ」

美「寄席がさびれませんか」

里「さびれます。映画館と同じ道をたどるでしょう」

岡「いいところのひとつもない社会だ」

岡「つまり何もかも本来の文化ではなく、最低共通文化というべきものまで落ちるわけだ」

里「テレビだけでなく、新聞や雑誌などあらゆる情報機構によって、すべての文化が、最低共通文化にまで落ちる。映画や音楽だけでなく、文学も科学も歴史も。一流の文学者や科学者がテレビに出て、自分の文学観だの、発明発見などをやさしく喋るわけだ」

綱「しかしバラエティ・ショウたるテレビに文学者や科学者を出したって…」

> 「そうか」山川俊三郎が膝を叩いた。「その社会では、文学や科学も、消費の対象なんですね。自分たちの手の届かないところで何かやっているのはけしからん。それがどんなにすばらしいものなのか、われわれにも平等に分配しろ。わかちあたえよ、わかちあたえよというわけですね。」（P173）

美「その人たちはテレビで具体的にはどういうことを」

里「ある作家が難解な名作を書いた場合に、どこがいいのかテレビで解説させるわけだが、ただ解説させても難解なので三面記事的にインタビューする。身の回りのことや家庭のことなど。作家は自分の文学を最低共通文化、つまり日常言語の水準にまで貶めてしまう。特に喋りもうまくないのだし。すると見ている人はこの程度かと思って安心する」

岡「さっきの芸能人の場合と同じだな」

里「文学者や科学者はスキャンダルをばらしても面白くないので、功績を貶める」

美「かれらの本は売れなくなるのでは」

里「しまいには芸能人視され、蔑まれ、本は売れなくなる。つまりそうした人物までが消費の対象になるということでは」

美「テレビを見た人が、これなら自分でも作家になれると思い始めて、文学の質が低下しませんか」

里「むしろテレビが、あなたたちにも簡単に小説が書けますよと煽り立てるでしょう。「やさしい文学講座」的なものに主婦や学生が殺到して、名誉や教養も平等にわかちあたえよ、わかちあたえよと」

岡「教養なんてもんは自分で本を読んで身につけるものだろう。なぜ本を読まない」

里「つまりそこには、本を読む能力や根気に欠けた人たちが来るんだ」

美「講師がいますか？　小説を教えるのは難しい。それに講師も喋るよりは書いたほうがいいのでは」

里「文化の切り売りの時代なんですよ。水準が落ち、テレビの需要にも応えられるということで、主婦や学生から本当に作家が出てくることもある。作家だって消費物資なのだから」

？「学者もかね」

里「一流の学者が何かを発見したり発明したり論文を書いたり世界的な賞を受賞したりすれば、たちまちよってたかって」

山「科学と名誉を、わかちあたえよ、わかちあたえよというわけですね、わかります」

岡「その理論を、無理やりやさしく解説させられるんだ」

里「つまり消費社会では、政治も科学も文化もすべて三面記事にされてしまう。尊敬すべき人物はひとりもいない、みんな平等なんです」

美「新しい本当の文化は生まれないわけですか」

里「文化というものが伝統として残ることを前提として創造されるような社会ではなく、むしろ後世に残るような文化を創造しようなどという行為は、いやらしいものとして」

岡「それは文化じゃねえな」

里「文化ということばの意味が違うわけだ」

美「芸能人も文学者も半分素人なら、完全な素人もテレビや新聞雑誌に登場するということにもなりかねませんね」

里「テレビや新聞雑誌への大衆の参加こそが、一般の社会人の夢であり、娯楽性なんです。自分もいつかは、という期待を抱かせる」

？「素人をテレビに出して何をさせる」

？「歌わせたり芝居をさせたり」

？「水準が落ちませんか」

？「すでに落ちてます」

？「失敗してもそれはそれで面白いわけだし」

？「まるでチンパンジーの動物ドラマだ」

？「するとテレビでは、そうしたいろいろな番組を並列的にやるわけですね、広告を入れながら」

？「広告も、その並列的な番組のひとつと考えた方がいいんじゃないですかね」

？「ニュースもやるんでしょうな」

？「つまり何もかも、テレビという巨大なバラエティ・ショウの中へ挿入するのに都合のいいものにされちまうわけだな」

里「だから内容も、それぞれの番組の価値を、広告も含めて、ほぼ等しいものにされてしまう。つまり全部平均かされてしまう。どれが必要、ではなくて、あらゆる情報の価値がすべて等しいものとして羅列される。新聞でも雑誌でも」

美「するとテレビも新聞も雑誌も内容は全部同じになってしまいますね、とすると、今やっている番組が何だか、わからなくなってしまいませんか。つまり、**ニュースだと思っていたら広告だったり**」

里「新製品の発売、レストランの開店など、広告でありながらもイベントとして、ニュース的に扱われます」

岡「新しい商品を次から次へ出したって、一般大衆がそんなに次から次へと買うだろうか。そんなに買うものがあるか？　いったい何を買うんだ。どういう考え方をするんだ」

里「考え方というのは特になくて、広告によって消費生活の訓練というか、消費のしかたの学習というか、そういうもので消費に馴らされているわけで、消費しなければならんという確固とした信念で消費してるんじゃない」

山「消費が無意識的に義務化されてしまっているわけだ。すると節約は反社会的行為」

里「節約なんかしたら社会の敵だから大っぴらに馬鹿にされる」

綱「買うものがなくなったら？」

里「広告宣伝による大衆教育によって、役に立ちそうで実際はほとんど無駄なものとか、同じ機能でも新しいデザインとか奇想天外な恰好のものとか、やたら宝石などの装飾品をいっぱいくっつけたものとかが売られる」

？「漁色家が女をあさるのと同じだな」

里「そうですね、商品の、その道具性への道徳心はなくなるんです」

岡「でも、家具などはそんなに簡単に消費できない」

里「消費社会が存続するためには、破壊に近い消費でなければ」

美「その盛大な消費はどこでやるんですか」

里「もちろん日常生活ですよ」

？「ゴミが出るな」

里「そうだ。ゴミの処理をどうしているんだろう」

山「日常生活までが見世物じみたものになりませんか」

里「なります。機能よりも、見世物的価値があるかどうかで買う」

岡「大量生産されると見世物的価値がなくなって、売れ残らないか」

里「ほとんど売れ残る。食うに困らなければ豊かだというのはわれわれの考え方で、この社会は、ありあまる豊かさでなければ豊かな気がしないんだ。」

美「そのような状態だと二十パーセントから三十パーセントは確実に貧乏人だと思うのですが」

里「階級社会ですから。ぼくはそれ以上だと思います」

美「それなのに平等社会だと言われているわけですか」

> 「そうですよ。そういう人たちに対しては、消費社会の外へ、ある種の理由で、はみ出している例外に過ぎないという考え方をみんなが持っていると思います。時には極めて稀にニュースとして、また事件としてそういう人たちの存在をとりあげて、それもバラエティの一部、見世物のひとつにしてしまって、もしかするとその人たちのことは誰も考えようとはしないかもしれません。また、大多数の人はその存在を知らんのではないでしょうか。何らかの、自分たちに関したことに夢中で」
>
> 「平等社会であるとされていることが、かえって気ちがいじみた消費を生むんだろうなあ」監督が悲しげに言った。（P182）

綱「商品への欲求じゃなくて、それは結局社会的階級への欲求なんだよ。建前的には平等主義と言われても、社会的階級はなくならない」

里「社会的階級を悪い制度としている社会ですからね」

岡「社会的階級は役割、職業は役柄と考えてそれを楽しむことが、どうしてできないのかな。スタッフ、キャストのない社会じゃ、救いようがない。どうせ『人生は活動写真』なのに、ほとんど全員が自分の役割を不満に思っていては、いい映画は作れねえよ」

？「不満社会だな」

？「悪口の投げつけあい、罵りあいの社会ですね」

？「他人のしたことの欠点をあばき立てるだけで、それを絶対に認めないという社会だよ」

…こんな感じに、みんながどん底まで暗い気分になったところでこの会話は終わる。「あーフィクションで良かった」などと言いながら。

『美藝公』の世界ではおそらく、「人生は活動写真」ということを誰もが納得していて、それぞれの役割（役柄）に満足して、楽しんで暮らしている。浅羽通明氏の『昭和三十年代主義』（P363～）にならえば、「欲張らず夢を諦める美徳。幸福を貪らない品性。分際と節度を守る禁欲」という生き方。

里井が、愛し合っている女優・町香代子との結婚を望まないというのも、自らの分をわきまえているからであり、彼女の「社会的な役割」を知っているからである。

要するに、辻希美あたりは、自分の社会的役割をわきまえなかったわけであることよ。これは山口百恵の結婚・引退あたりから許されるようになった生き方なのかもしれない。

ちなみに『美藝公』が連載されたのも、山口百恵が引退したのも同じ一九八〇年であった。

筒井康隆が山口百恵の引退を参考にして本書を書き進めたのかは定かでないが、旧き日本の芸能界の在りかたが完全に崩壊した瞬間（たぶん）と、この名作が執筆された時期がまったく同じというのは注目に値する。かもしれない。

それにしても『美藝公』の内容は、現代のわれわれが読んでもドキリとすることしきり。二八年前から今まで、まったく何にも変わってないのだなあ。はあ。

Permalink | コメント(0) | トラックバック(0) | 17:03

ホームページ制作会社一括見積

ホームページ制作一括見積ならアイミツ！ 失敗しない発注先探しの新常識。完全無料

● ○

→

コメントを書く

ozakit　メール(非公開)　URL

投稿

トラックバック - http://d.hatena.ne.jp/ozakit/20080723/1216800188

あらゆる情報収集が
これ一つで

B!

アプリを
ダウンロード

1000万を超えるサイトの
人気記事をまとめてチェック

iOS / Android対応アプリを無料でダウンロード

リンク元

25 http://b.hatena.ne.jp/umedamochio/rss
21 http://homepage2.nifty.com/ozakit/index.html
19 http://d.hatena.ne.jp/keyword/浅羽通明
12 http://images.google.co.jp/imgres?imgurl=http://f.hatena.ne.jp/images/fotolife/o/ozakit/20080320/20080320232631.jpg&imgrefurl=http://d.hatena.ne.jp/ozakit/20080320/1206023099&h=338&w=450&sz=31&hl=ja&start=128&um=1&tbnid=Jav17ts2HqMU0M:&tbnh=95&tbnw=127&pr
10 http://d.hatena.ne.jp/keyword/辻希美
9 http://twitter.com/mochioumeda
8 http://blog-search.yahoo.co.jp/search?ei=UTF-8&p=山口百恵&fr=top_v2&tid=top_v2&search_x=1
6 http://blog-search.yahoo.co.jp/search?p=山口百恵+&ei=UTF-8
6 http://d.hatena.ne.jp/keyworddiary/辻希美
5 http://search.yahoo.co.jp/search?p=山口百恵掲示板&search_x=1&tid=top_ga1&ei=UTF-8&qrw=0&pstart=1&fr=top_ga1&b=251

リンク元をすべて見る

<[読書]筒井康隆『美藝公』２―子... | [掌の小説]座興に非ず>